

平成 26 年度子ども読書連携フォーラム報告

目次

はじめに	2
【第一部】	2
1. 国際子ども図書館の概要・子どもの本の選書 西尾初紀〔児童サービス課長〕	2
2. 講演 事前アンケートから見える選書の課題 堀川照代氏〔青山学院女子短期大学教授〕	3
3. パネルディスカッション	3
◆鈴木由美氏〔静岡県立中央図書館〕	4
◆伊藤明美氏〔千葉県浦安市立中央図書館〕	4
◆鳥海裕美〔荒川区立尾久小学校 学校司書〕	6
4. ディスカッション	7
【第二部】	10
5. 参加者ディスカッション	10
6. おわりに	10
子ども読書連携フォーラムの意義と成果	10

はじめに

国際子ども図書館では、子どもの読書に関わる連携協力の促進を目指して、平成 25 年度から「子ども読書連携フォーラム」を開催している。これは、児童サービス連絡会（平成 19 年度から平成 21 年度）、児童サービス協力フォーラム（平成 22 年度から平成 24 年度）の後継企画として実施しているものである。

2 回目となる平成 26 年度は、平成 27 年 3 月 2 日（月）に、「子どもの本の選書を考えるー知識の本を中心にー」をテーマとして、公共図書館や学校図書館の担当者など 83 名の参加を得て開催した。参加者のうち図書館員には事前に各館の選書の現況と課題等を把握するためアンケートを依頼した。同時に、実際の選書で不足を感じる分野や紹介したい知識の本を提示してもらい、運営の参考にした。第一部では、概況報告とパネルディスカッションを行い、第二部では第一部を踏まえて参加者によるグループディスカッションを行った。

以下、当日のフォーラム内容を報告する。

【第一部】

1. 国際子ども図書館の概要・子どもの本の選書 西尾初紀〔児童サービス課長〕

国際子ども図書館では、子ども向けの閲覧室「子どものへや」を設置し、フロアワークやおはなし会、小展示等の直接サービスを職員が行っており、「子どものへや」の開架資料が、これらの直接サービスのベースとなるため、選書はすべてのサービスの根幹ととらえている。

国際子ども図書館は、納本図書館である国立国会図書館の支部組織である。2 階にある第一資料室には、その年に受け入れた児童書を開架しており、知識の本に関しては、ここに並べられたすべての本に目を通して「子どものへや」用の選書をしていると実践の紹介を行った。

最後に事前アンケート結果のうち、各図書館の選書業務に関する部分を概説し、国際子ども図書館が作成した選書ツールリストや、アンケートで資料の出版が不足していると意見が挙がった分野の本のリスト等を紹介した。

◆国際子ども図書館ホームページから選書業務に活用できる情報

- ・本を読んで世界を知ろう ―学校図書館セット貸出しができるまで

<http://www.kodomo.go.jp/promote/activity/school/>

- ・子どものへや「小展示」

<http://www.kodomo.go.jp/use/room/childroom/month.html>

- ・展示から広がる本の世界 ―子どものへやにおける展示の工夫

<http://www.kodomo.go.jp/promote/activity/exhibition/index.html>

- ・国立国会図書館キッズページ「よんでみる？」

<http://www.kodomo.go.jp/kids/research/book/index.html>

2. 講演 事前アンケートから見える選書の課題 堀川照代氏〔青山学院女子短期大学教授〕



堀川氏は、知識の本の定義を示し、事前アンケートであげられた選書業務における課題を 1.出版・流通、2.資料購入予算、3.選書組織・状況、4.選書技能、5.購入、6.ニーズ、7.提供・利用・評価の項目に分けて分析した。

○知識の本の定義

- ・ノンフィクション、辞書・事典類、書誌・索引類、郷土資料、行政資料がある。
- ・「最初から通して読む本」と「必要な箇所を読む本」の2種類がある。
- ・フィクションかどうか迷った場合は、著者が何を伝えたいのか、知識なのか、お話なのかを考えるとよい。(杉山きく子『がんばれ！児童図書館員』(本作り空 2014) 参照)

○選書の経験値をあげる方法

実際に自分でいろいろな本を読むことにより、自分なりのものさしを築いていくことであり、そのものさしを持ち得た人が、専門家でありプロの児童図書館員と言える。

○選書のニーズ

特に学校図書館では、図書館員の選書と教員のニーズとのギャップを回避するために、教科書を読んで授業内容を把握することが大切である。

○フィードバック

ただ排架して貸出しするだけでなく、選書した資料がどう使われたのか、子どもたちの理解レベルにあったのか、学びの目的にあったのかを評価し、どのように選書にフィードバックするかを考え、利用者に本を手渡していくことが大切である。

3. パネルディスカッション

テーマ：子どもの本の選書を考える ―知識の本を中心に―



まず、パネリスト3名が自館の現状や取り組みについて事例発表し、続いてコーディネーターや参加者からの質問をまじえてディスカッションを行った。

◆鈴木由美氏 [静岡県立中央図書館]

○選書方法

全点収集の児童書を利用して直接選書し、貸出用の複本を購入（現在は予算の関係で購入を停止中）。選定した資料についてのみ、レビュースリップを作成している。

レビュースリップは、以前受講した児童サービス図書館員養成専門講座で講師に絶賛されていた横浜市立図書館の書式を採用。元の書式では5段階評価だが、このうちA～Cを使用して優先順位を付け、購入の指標としている。

○新刊児童図書巡回展示研修会

県内の公共と学校図書館の児童図書資料の充実及びその選書に携わる職員の資質向上を図るための研修会である。県立中央図書館が全点購入している新刊児童図書のうち、約 1,000 冊を研修会場で展示するとともに、選書に関する研修を行い、参加者の相談に応じている。年 1 回、県内東部、中部、西部のいずれかの図書館で開催し、3 年で一巡する。定員は、50 名である。静岡県は横に長い県で、県立図書館から距離的に離れた地域の図書館での選書に役立つことや、新刊展示と同時に選書についての研修を行うことで、新刊書を見るだけでなく、選書技術の向上を図ることができる。

○新着児童図書を語る会「新刊サロン」

県立中央図書館が全点購入している新刊児童図書のうち、直近 1 か月間に受け入れた新着図書について、参加者間で自由に語り合う会である。同館の担当職員が在室し、意見交換がスムーズに行われるよう、調整を図る。年 4 回開催し、定員は 10 名である。参加者が少人数であるため、活発な意見交換が行われることが多く、学校司書、公共図書館職員、ボランティアなど、立場の違いによる評価の違いを互いに知ることができ、多角的な評価につながっている。また担当職員にとっては、現場の生の声を聞くことができる貴重な機会となっている。

○静岡県立図書館の選書の課題

- ・職員が短期間で異動するため、知識と経験の蓄積が図りにくいこと。
- ・選書会議までに担当部分に目を通す時間が取りにくいこと。
- ・本そのものの評価なのか、自館蔵書とするための選定なのか、定まっておらず日々悩んでいること。
- ・直接サービスが限られるため、選書が適切であったか、子どもの反応を確認できない点。「新刊サロン」を開催することで現場の状況を知ることができ、とても参考になっている。

◆伊藤明美氏 [千葉県浦安市立中央図書館]

○浦安市立図書館の児童サービスの特色

- ・0 歳から切れ目のないサービス
- ・本は選び、良い本は複本を置く

- ・フロアワークを重視 その場で本を読む。浦安市立図書館に来館する子どもには、図書館は本を読んでもらえる場所だと思ってもらおう。
- ・保育園、幼稚園、小学校等の類縁機関への読み聞かせやブックトーク等のサービスを年間 956 回実施しており、それらの実践が同館の児童サービスを育ててきた。
- ・選書とサービスは一体のものである。

○浦安市立図書館の選書

- ・レビュースリップは作成していないが、選定したもののデータにメモ程度の評価を入れて役立っている。
- ・知識の本は、具体的かつ正確で、子どもの知識欲を育てるような構成を望む。
- ・選書はサービスの始まりである。子どもの反応をよく見て、大人（学校司書、教師、親）からの情報を取り入れて選書にフィードバックすることが重要である。

○蔵書の検証

- ・蔵書を分野ごとにチェックすることで、基本図書の確認・補充もれがないかなどの点検ができる。
- ・レファレンス記録や館員同士の情報交換も蔵書の検証に役立っている。司書は、子どもの年齢を見て本を薦めがちだが、子どもが本当に興味をもったときは、もっと専門的な本や詳しい本を見たいこともある。
- ・推薦図書リストの作成も蔵書の検証になる。

○科学の本の種類

- ①頭で考える本（例：『ジャガイモの花と実』仮説社 2009）、②目で見ると本（例：『トウモロコシの絵本』農山漁村文化協会 1997）、③手でためす本（例：『卵の実験』福音館書店 1977）がある。このうちのどれに当たるのか考えながら選書を行うとよい。

○蔵書群

- ・調べ学習の本だけでなく、子どもがふと興味をもったときに芽をつまずに、興味の芽を伸ばしてあげられるような資料が必要。
- ・新しいから良い資料とは限らない。
- ・写真や図や表も必要だが、きちんとした文章での説明も必要。
- ・知識の本の選書の際には、1冊ずつ現物を見て、同じテーマの本を比較し、一般書で内容を確認することが大切である。

○知識の本の未来のために図書館員が心がけること

- ・その時に必要な本を選ぶ短期的視点と、今後蔵書として棚に並んだ時にその本がどのように役立つかを考える長期的な視野を持つこと。
- ・具体的なひとりの子を想定して選んだ本が、後になって全体の役に立つことがある。
- ・選んだ本を生かすサービスを展開すること。

それには、①図書館員自身が本を読み、評価すること②継続した研修③公共図書館と学校の連携④基本図書リストの作成・改訂⑤作り手（出版社）へのフィードバックが重要と思う。このフォー

ラムが、本を手にした時の子どもの反応や児童図書館員が望む知識の本を出版社に伝える役割を果たしてくれることを期待したい。

◆鳥海裕美〔荒川区立尾久小学校 学校司書〕

○学校図書館の機能

公共図書館と違って教育課程への寄与という役割があるため、3つの機能（読書センター、情報センター、学習センター）のうち、とくに学習センターとしての機能が重要である。

○教科書

国語科の教科書には、学習したことを自然に読書活動に結び付けるため関連する本の紹介があり、荒川区の学校図書館では、教科書に紹介されている本はすべて揃えるようにしている。

○読書

・読書というと、一般的には文学作品を読み通すことと考えられがちであるが、学校教育では、まず教科書を読むことで内容を読み取る力をつけることが第一歩である。資料を調べて読むこと、図鑑・事典類を読むことがさらに読む能力を鍛えるため、知識の本の適切な選書は大切である。

・調べて課題解決をはかるために読むことも知的好奇心を育む読書とすると、学習センターとしての機能を強化した学校図書館づくりが大切。

○教科の学習での図書館資料の活用

- ・各教科の年間指導計画の中に図書館の活用を盛り込む。
- ・課題解決に必要な図書館資料が、どの場面でどのように活用されるかを絞り込む。
- ・学校司書が教科書を見て単元別に学習参考資料リストを作成し、教員に提示する。
- ・司書教諭を中心とした授業作りが重要。

○選書

・授業に活かせる選書をするのが重要であり、選書の基本は学習指導要領と各教科の教科書。
・教科書の内容を検討し、学年・発達段階に応じた選書を行う。とくに4類の動植物の本や各種図鑑などは、低学年向けから高学年向けまで何種類かそろえる。

・国語科なら、神話・昔話・短歌・俳句など伝統的な言語文化を理解するための資料をそろえることも重要。

・全国学校図書館協議会の標準配分比率と比べて、自校の蔵書構成に偏りがいないかチェックする。

・選書は、継続的、計画的、組織的に行い、授業に活かすことが重要。学校図書館活用授業では、担任と司書が連携し、いつまでに、どんな資料を、何冊くらい準備するかを確認しながら進める。

・よい選書をしてもらってもそれだけで児童が本を読むわけではないので、あらゆる機会をとらえるため全校的な取組が大切。

4. ディスカッション

【レビュースリップの保存方法】

鈴木：現物はPDF化し、データはエクセルファイルで受け入れ順に並べている。購入にあたって評価でソートしたり、購入したものには印をつけたりしている。

伊藤：書誌を開くと評価点を付けられるシステムがあるので、購入した本には、選書の際に入力している。とくに（購入するかどうかの）ボーダーラインの時、「複本は必要ないが一冊はこういう理由で買う」などのデータを打ち込んでいる。文章と、ABCなどの評価をつけている。

鳥海：レビュースリップは作成していないが、学習参考資料リストの備考欄に資料の何ページが学習に役立つかという情報を入れて先生に提示している。また、実際に授業で使った資料の情報は次年度に修正するなどして、データとして残すようにしている。

【選書した本をどう使ってもらうか】

堀川：アンケートで、図書を提供するとき、使う手だてをいっしょに提示することが必要と書いてくださった方がいた。鳥海さんのお話の学習参考資料リストは、この本のここが役に立つということを先生たちに伝え、すすめる手だてだと思う。伊藤さんのお話にブックトークも出てきたが、ほかに、選んだ知識の本を子どもたちにどう使ってもらうかという工夫があるか。

伊藤：レファレンスの記録は取っているので、こういう質問にこういう本を使ったら子どもがどう反応したかはエクセルで残している。各館の情報が共有できるようになっている。

【購入と貸出し】

堀川：中央館で選書をするので、手渡したいとき分館にその本がないというジレンマがあるというアンケート記述があったが、浦安はどうか。

伊藤：一館がまとめて選書をするのではなく、利用者と直接接している各館の司書が選書することが大切。分館しか買っていなかったという例もあり、それを機に購入することもある。

堀川：静岡県立は県内の図書館や学校図書館への選書支援が中心で、直接サービスは行っていないということだが、また、団体への貸出し対象には学校図書館も含まれるか？

鈴木：直接サービスは限定的で、「えほんのひろば」用を買っているものは子どもも借りられる。また、子ども図書研究室の複本の貸出しもしているが、子どもは入れないので大人が見て借りていく。団体への貸出しについては、学校図書館へも、県内の図書館へも貸出しができる。ボランティアでも団体の形をとっていれば貸し出す。全点収集資料については、県内の図書館の窓口まで貸し出し、館内で見ってもらう。

【ニーズとフィードバック】

鳥海：(司書教諭の先生が選書する資料の割合についての質問に) 全教員に年度末と年度初めにアンケートを行い、それをもとに司書教諭や図書主任など図書館部の先生たちと一緒に選書を行う。各学期に 1 回ほど、展示会を見に行くなどし、管理職の先生との協議を経て発注する。アンケートでは、書名ではなくテーマで希望が出ることが多い。教科書を見て判断するので書名は書かなくてもよいと伝えている。子どもがどう使ったかについては、先生方や司書の目で有効であろうと購入しても、実際には子どものレベルに合わないこともある。低学年向けには知識の本は幼稚園生レベルのものも入れている。

伊藤：ブックトークは小学生向けなので、反応を返してくれる。あとは、レファレンスをした後の子どもの反応を見る。公共図書館だともっと小さい子もいるので、言葉では自分の探しているものを説明できないこともあり、レファレンストークが重要になってくる。この子は何に興味を持って、どういうことをどのくらいまで知りたいのか、フロアワークで、一対一でしていくことが欠かせない。これは図書館員にとっても勉強になる。

鈴木：(直接児童サービスをしていないのでニーズがつかみにくい)「えほんのひろば」では、おはなし会に時々職員が出かけていくので、若干のフィードバックがある。ただ現在、おはなし会の参加年齢が低くなり赤ちゃんがほとんどなので、それ以上の年齢の絵本をどう評価するかについては、弱いところである。いろいろな会で間接的に話を聞かせていただくしかない。現在の業務の中では難しいが、できれば、近隣の小学校や幼稚園とモデル校的に結びつきが持てればと思っている。

西尾：国際子ども図書館の学校図書館セット貸出しでは、読書郵便と言って、本を読んだ子たちが感想文を書き、次の学校に送られるセットの中に入れている。それを、次の学校の子たちが読むという文通のような取組を行っている。

堀川：子どもの反応をどう把握するかは難しいと思うが、学校図書館支援センターや市町村立図書館の方で、学校に貸し出して返してもらうときに何か工夫をしている方はないか？

フロア：学校からの希望に応じて、授業で使うテーマで一箱 40 冊のパックを作り、市内の小中学校を巡回するサービスをしている。学校司書がいるので、返却の時に、授業でどう使ったかを写真や文章で返してもらうようにしている。

堀川：学校司書に、授業が終わった後の発展読書に使う本をどう選ぶかを聞いたことがある。例えば国語で「ねことねっこ」を読んだ後だと、大きな「つ」と小さな「つ」の区別が明確につく本、子どもたちの興味を持続するように「つ」が最初のほうのページに出てくる本、教科書と似た活字を使っている本などを基準にしていた。

【知識の本の複本と古い本の価値判断について】

伊藤：知識の本にも基本的な本には複本が必要だと思う。どのくらい必要かは難しい。中央図書館の児童書の子算が年間で約 600 万円だが、そのうち約 6 割が複本や傷んだ本の買い替えで、

残り 4 割が新しい本。新しい本も必要だし、古くても基本的な本は必要。ここに持ってきたのは、私が小学生の時に使っていた昭和 30 年代発行の植物図鑑だが、フクジュソウがキツネボタン科とある。実は、90 年代に DNA から判定する新しい植物分類が出てきて、新しい図鑑には、キンポウゲ科としてある。この本は図書館にはないが、後ろの方の文章による説明部分が詳しい。今の新しい図鑑は文章が少なく、写真と絵が多い。しかし、目から入ったものを言葉にするのは子どもには難しく、自由研究などで文章を書こうとすると書けない。また、これは、昔平凡社から出ている大項目の『児童百科事典』で、瀬田貞二が編集したもの。写真は少ないが、文章の質がよく、はっとするような日本語で書かれている。私たちは知識の本だと知識を得ることを優先してしまい、文章の質まで目がいかないが、子どもが知識を求めて手にする本が図や表だけでいいわけではなく、自分の言葉で書いたり話したりするためにはよい日本語の説明文が必要だと思う。何を買って何を捨てるか、どうやってストックしておくかも含めて、ひとつひとつ丁寧に選んで、継続的に選書し続けたいといけな

堀川：別の先生とお話した時、子どもたちはこの頃説明文を読む機会が少なくなっているとおっしゃっていた。よい日本語で論理的に書いてあるものを子どもたちに手渡したい。

【選書のためにどんな勉強や経験をしてきたか】

鳥海：学校図書館の現場から言うと、実際に本を手にとって、子どもたちが読みとれるかを確認しないと行けない。公共図書館にも行くし、国際子ども図書館の資料室では 1 年間に出版されたものや、出版流通にのらない行政が出した資料なども見られる。また、同僚の司書からも授業に活用できる本を教えてもらって役立っている。土曜も日曜も本を見ることを心がけている。

伊藤：初代図書館長から、図書館員は目がつぶれるまで本を読み、職務時間外に読むのが図書館員と言われた。自分の中にストックを作って、新しい本に出会った時照らし合わせて考えるためには、読むこと。それから、子どもの小さい声を聞き逃さないこと。子どもの言うことは鋭く含蓄に富んでいる。本を読み、子どもの声をきく、これに尽きると思う。

鈴木：やはり、本を読むことが大事。プライベートでも児童書を読みつづけていて、たまには大人の本も読みたいと思うほど。それ以外では、勉強会や研修会にできるだけ参加している。児童図書館員養成講座で、知識の本の選書について学び、評価の定まった本を読んだのが勉強になった。また、児童図書館研究会静岡支部で、毎年テーマを決めて勉強し、そこで仲間と意見を交わしている。

【第二部】

5. 参加者ディスカッション



今回の試みとして、第一部の内容で参考になったこと、自館で取り入れられそうなヒントや気づき、今日得たことを各自で付箋に書き出した。

最初に自己紹介と選書の状況、今日得たことを紹介し、各グループで共有した。その後、残り時間でディスカッションを行った。

○グループディスカッションの内容の一部を紹介する。

- ・選書が資料を読んで終わりではなく、評価して、改善していくことの大切さなどフィードバックの重要性を知った。
- ・レビュースリップと評価選書眼をあげること、読むこと
- ・浦安図書館さんの毎日行っているフロアワークがとてもよい取り組みだと思いました。現場で子どもと接することで、子どもの声を聞くことが、選書にもつながってくるので、参考にしたい。
- ・出版社への要望をしていくという視点が今までなかったので、「目から鱗」でした。今後、機会のあるときには要望を伝えていきたいと思いました。

6. おわりに

堀川氏が、講評として、1. 本を読むこと、2. 子どもと本を出会わせること、3. 勉強会や研修会に積極的に出て、自分のものさしを他の人のものさしに合わせることを説かれ、選書をきっかけにして、次の段階に進んで欲しいと締めくくられた。

フォーラム終了後も、会場に多くの方が残り、交流が1時間近く続いていた。

子ども読書連携フォーラムの意義と成果

終了後のアンケートでは、満足度（「満足」「おおむね満足」の合計）は93%であった。「選書について、異館種の話が聞けて参考になった。ぜひ、続けてやってほしい。」「こういう機会があることにより視野が広がった。」「とても充実した内容で有意義だった。もう少し時間に余裕があると良かったと思う。」との感想が寄せられた。

当館は今後も、ホームページなどを通じて、当館が蓄積した選書に関するノウハウを全国に発信し、フォーラム等を開催することで、児童サービス関係者に役立つ情報や交流の場を提供し、児童サービス現場からの期待に応えていきたい。